

ドラッグ・コート

迷う仔猫と不思議な薬

天堂里砂

Risa Tendo

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 香坂あきは

目次

序章

一章 不審な訪問者

8

二章 仔猫の隠れ家

43

三章 子どもと大人と

74

四章 かつて子どもだった大人たち

118

五章 コウノ・メデイカルカンパニー

172

真夜中の不思議

209

あとがき

216

ドラッグ・コート

迷う仔猫と不思議な薬

序章

幼い少年がベッドですやすやと眠っている。その枕元に膝をつき、彼の母親は無垢な寝顔を覗き込んだ。

「私が目を離れたからよ……」

力ない声で呟いた彼女の肩に、夫が優しく手を置く。

「君が悪いんじゃない」

「でも、私の所為なのよ」

首を左右に振って彼の言葉を否定した彼女は、何事もなかったかのように眠る息子の髪を撫でる。

「絶対に、この子だけは守るから」

震える、けれど力強い声で女は言った。

「この子に恨まれたってかまわない。この子が無事

に大人になって、幸せに生きてくれるなら、私はなんだってするわ」

彼女の頬を、取り返しのないミスを犯した後悔の涙が流れ落ちていく。彼女の夫は、そんな妻の姿に唇を噛んだ。己が不甲斐ないばかりに、彼女を苦しめてばかりいる。

「君だけが悪いんじゃないんだ。だから、思い詰めないでくれ」

彼女は肩に置かれた夫の手に手を重ね、少しだけ振り返って淡く微笑む。

「私の所為よ。でも、あなたが力を貸してくれるって分かってる」

「もちろんだ。私も、君とこの子を守るためなら、耐えられる。耐えてみせるよ」

あの出来事が夢であったかのように、幼子は天使のような寝顔で眠り続けている。

一章 不審な訪問者

「じゃあなー。お疲れー」

「バイバーイ」

「また明日ー」

活動を終えた体操部の面々が、わいわいと声を交わして散っていく。青みがかったグレーの制服に着替えている者もいれば、ジャージ姿の者もいた。

夏休みを目前に控えた七月の中旬。七時をまわっているといつてもまだ暑い。そんな中で一人だけ、白い半袖のカッターシャツにきつちりとネクタイまで締めている少年がいる。

「バイバイ、東条くん」

「また明日ねー」

女子部員に声をかけられた彼は、ちらりとそちら

を見やると、にこりと笑って丁寧に頭をさげる。

「お疲れ様でした。また明日」

生真面目な応対に、彼女たちはきやつきやと笑いながら手を振り、スカートの裾をひらめかせて走っていた。

十六歳という年齢にしては、落ち着いた様子の彼の二重の目は優しげで、いつも穏やかな微笑みを浮かべている。そんな少し大人びた印象が、女生徒の興味をそそるらしい。

しかも少し長めのふわりと柔らかそうな髪に、通った鼻筋、落ち着いた眼差し、笑みをたたえる形よい唇。どれをとつてもまるで《王子》なのだと。

さらに彼が時折、整った顔に影のある寂しそうな表情を浮かべるのがたまらないのだと、彼女たちは噂する。

「相変わらず、モテるねー、克己くん」

彼の――東条克己の背中に、クラスメイトであり、部活仲間でもある少年がのしかかる。彼は体操部に

入っているにしては背が高い。どちらかといえは体操向きに小柄な克己の背中に乗りあげるようにしているが、克己はそれに文句を言うでも振り払うでもなく、小さく応じた。

「……別に、そんなことは、ないと思うけど」

「何言っちゃつてゐるの。体操部のプリンスなのに！」

「……………」

反応に困って黙り込んだ克己の、少し伸びすぎてゐる髪が、ぐしゃぐしゃと掻き混ぜられる。

「おまえのこの薄幸の美少年っぽい顔が、女子には人気なんだよ！ 顔よし、成績よし、運動神経よし。家は金持ちで、かーちゃん美人！ ずるい！ 神さまは人に二物も三物も四物も与えるんだああ！」

わいわいと耳元で騒ぐ友人に、ほんの少しだけ唇に曲線を描いた克己は、

「そうなのかな」

と呟いた。友人は克己の言葉が気に入らなかった

のか、彼の肩に腕を回し顔を覗き込むようにして問いかける。

「なんだよ、違うっていうのか？」

違いはしない。彼の言っていることは、おおむね正しい。

そう。外から見れば、それはおそらく『事実』なのだろう。きつと誰もがそう思うのだ。

けれど、内側はどうだろうか？

「いや、恵まれすぎてて申し訳ないよね、あはは」

克己は冗談めかした口調で答え、わざとらしく

笑った。友人もまた、笑いながら、

「ちえ、贅沢ものめー！」

と唇を尖らせる。

そんなふうに、冗談で誤魔化して、真実は誰にも話したことはない。家のことを話せるほどに、仲のよい友人はいないのだ。クラスメイトや部活仲間には、話したところで、結局は「贅沢だ」と言われるだけなのだし。

克己はふうふうと文句を言い続けている、形ばかりの友人から目を逸らした。

「……隣の芝は青い、だけかもよ……？」

自分はとても恵まれていて『幸せ』なのだ。

たとえその芝生が枯れていようと。

己に言い聞かせるために、克己は極小さな声で呟いた。

部活を終え仲間とも別れた克己は、自宅の最寄り駅からの帰り道を、憂鬱な気持ちで歩いていた。英語の教材をイヤホンで聴いているのだが、その半分も頭には入ってこない。

時刻はもうすぐ八時になろうとしている。夏休みの大会へ向けて、これからはもっと帰りが遅くなることだろう。

克己の家は、世間では高級住宅街と呼ばれる所にある。もともと家自体は他に比べれば慎ましかで

小さいし、金持ちであることを殊更に誇示しているわけではない。

そんな裕福な人々が住む街で、東条家がなんとなく寂しい印象を受けるのは、余裕のある土地の使い方 of the せいだろうか。広い敷地にぽつんと建っている。克己の家族は一人息子である彼が小さかったころにこの地に移ってきた。近所付き合いはろくになく、周囲から浮いているような、取り残されているような、そんな気がする。それも、寂しい印象の一因かもしれない。

近所付き合いがないことには理由がある。母は、父が言うには少しだけ「疲れやすい人」で、一年のほとんどを家の中で過ごしている。いわゆる、引きこもりと言われる状態である。

それなのに、製薬会社の研究開発部に研究員として勤めている父は、仕事が忙しいらしく、家にいることが少なかった。さらに郊外の勤務地までの通勤に時間を使う彼は、朝早くに出て行き、帰ってくる

としても夜中のことだ。泊まりも多い。とても近所と付き合える時間的余裕はない。

近所の家の前で、小型犬を抱いた女性と、小学校低学年くらいの女の子を連れた、塾の迎えにでも行っていたらしい女性が、門扉を挟んで親しげに話し込んでゐる。二人は克己が歩いてくるのに気づくと、彼のほうへ顔を向けた。

「あら、おかえりなさい。帰り、遅いのね」

「……こんばんは」

犬を抱いて門の内側に立っているのが、この家の住人なのは間違いない。ただ、女の子を連れているほうの女性は、どこに住んでいるのか知らなかった。ときどき見かける顔なので、近所であることはたしかなのだろうが。

克己はイヤホンを外すと笑顔を作り、できるだけ明るく挨拶をする。

「部活の夏休みの大会に向けて、練習中なんです」
「そうなの。がんばってね」

励ましの言葉に頭をさげて、克己は彼女たちの前を通り過ぎた。

——克己くん、今、高校一年生だったかしら……？

背後から、そんな言葉だけが聞こえてきた。その先にどんな会話が交わされたのかは分からない。けれどきくと、両親のことも噂されているのだろう。

滅多に帰らない父に、ほとんど外へ出ない母。格好の噂の的だ。

だから克己は、あえて優等生であろうとしている。両親のせいであつまらない噂話に巻き込まれるのは御免だから。

大企業に勤める父親と美人の母親を羨ましがられる優等生の実体は、そんなものだ。

溜息をついて、克己は英語の教材を聴くのをやめた。そして、自宅の前で足を止める。

白い壁の二階建ての家が、彼の家だ。
階段を二段のぼり、克己が門扉に手を伸ばそうと

したとき、塀^{へい}の上を歩いてきた大きな猫が可愛^{かわい}らしく鳴いた。

「にゃー」

普段街で見かける猫の二回りは大きい長毛の猫は、克己^{くき}の飼^かい猫だ。サバトラ柄で、首の回りに白い襟^{えり}巻^まきをしているようにふさふさとした毛が生えている。金色のくりくりした目が、克己^{くき}をじっと見つめていた。

「お帰り、志摩子^{しまこ}さん。見回りですか？」

「にゃー」

志摩子は二年前の雨の日に、帰り道で震^{ふる}えていたのを、克己^{くき}が拾^{ひろ}って帰った猫だ。野良猫^{のら猫}だったのか捨て猫^{すて猫}だったのか、それとも迷^{まよ}い猫^猫だったのか定^{さだ}かではないが、念のため飼^かい主^{しゅ}を捜^{さが}しても見つからなかった。

弱^{よわ}っているものの成猫^{せいびょう猫}だと思っていたが、どうやら彼女は大型猫であるメインクーンの子猫^{こ猫}だったらしく、それからむくむくと大きくなり、今ではす

っかりご近所のボスの存在である。

克己^{くき}はすり寄^よってきた志摩子^{しまこ}を撫^なで、ぐるぐると嬉^{うれ}しそうに喉^{のど}を鳴^ならす彼女^{彼女}を抱^{かか}きあげた。

「どっこいしょ」

思わずかけ声^{かけこゑ}が必要^{ひつぎやう}になるのは、彼女^{彼女}が八キロもある巨猫^{きよ猫}に育^うったからだ。もはや最近^{さいきん}は、本当に猫^猫なのかどうか疑^{うたが}いたくなるくらいだ。

「今日の夕飯^{ゆふめし}はいつものカリカリな」

「にゃーん」

克己^{くき}の言葉^{ことば}に答^{こた}えるように志摩子^{しまこ}が鳴いた。

彼女の夕飯^{ゆふめし}だけでなく、最近^{さいきん}は自分の食^{しょく}事^じについても考^{かんが}えなくてはならない。

「俺^{おれ}は何^{なに}にしようかな……？」

「うにゃ？」

つんつんと鼻先^{はな}を克己^{くき}の頬^ほに当てて、志摩子^{しまこ}が甘^{あま}えてくる。そんな彼女^{彼女}の目^めを見おろしながら話^わしかける。

「母^{はは}さん、まだ調子悪^{わる}そうだもんな？ 部屋^{へや}に引き

こもったままだし」

「にや」

「どうせ——」

父さんは、今日も帰ってこないのだろうし。

克己は言葉を途切れさせた。

分かり切っていることを、今更ぼやいても仕方がない。

「にやあ？」

克己の言葉を分かっているのかいないのか、志摩子が心配そうな声で鳴く。克己によく懐なついているので、やはり可愛い。

家に帰るのは憂鬱でも、温かい彼女を抱かかえていると、ほっとする。

克己は志摩子を抱いたまま、門扉を開けようとした。しかし、志摩子がびくりと背後に顔を向けたのに気付いて、振り返る。

そこには見知らぬ男が立っていた。

「東条克己くんかい？」

「え？ はい……」

まるで待ち伏せされていたかのようなタイミングで声をかけられ、扉とびらの取っ手に手をかけた状態で、克己は戸惑とまどいながらも答えた。

父と同じくらいの年に見えるので、四十代中ほどだろうか。その後ろには彼よりも若い男が一人、そして道の端に寄せられて停まる白い車の運転席に、もう一人男が座っている。

車が近づく気配けはいも音もなかった。つまり彼らは、自分に悟さとられないように、意図的に気配を消して近づいてきたのか。

真夏に近く、夕方になってもまだ暑いというのに、彼らはスーツ姿で、ネクタイまできっちりと締めている。

ぎゅっと抱きしめた志摩子が、得えたい体の知れない男たちに対して牙きばを剥むき威嚇いかくしている。

困惑こんわくしたままの克己は、志摩子の頭を撫なでるように押さえ、彼らの様子を窺うかがった。

「あの……？」

克己が不審に思いながら用件を促すと、声をかけてきた男が笑みを浮かべた。

「ああ、失礼。私たちは、君のお父さんの同僚でね、お父さんから君を連れてくるように頼まれてきたんだ。会社まで一緒に来てくれないか？ お母さんのことで、君に色々と話があるそうなんだよ」

「……………話？」

一体、何の話だろうか。

「大切なことだから、直接話をしたいと言っていてね」

「父が、僕に、ですか……？」

その一言で、克己の心の中に警告音が鳴り響いた。これまでの克己の記憶の中で、父から話があると言われたことなど一度もない。大切なことだろうとなんだろうと、父が克己と向き合って話したことなど一度もないのだ。

ただの一度でさえ、だ。

だいたい、母のことで話がしたいなら、家でのほうが自然ではないか。母は家にいるのだし。

もちろん父はいつも帰ってくるのが遅いし、克己としても彼とわざわざ顔を合わせるために部屋から出たりはしない。それどころか、顔を合わせないように避けているくらいなのだ。

それにしても、何故わざわざ会社まで出向く必要があるのか。それも、迎えを寄越してまで。

それとも、連絡があつたのだろうか？

克己は鞆に手を入れると、そつとスマートフォンを確認した。しかし着信があつた様子はない。

不自然だった。

頭の中で、警鐘が鳴る。

——これは、嘘なんじゃないか？

克己は志摩子を抱き直し、改めて男たちを見る。

「……用があるなら、父から直接連絡があるでしょうから、一度確認してみます」

「お父さんは連絡できないくらい忙しいんだよ。だ

から私たちがわざわざ迎えに来てあげたんだ。さあ、そんなに警戒しないで。ほら……」

「いえ、タクシーで行きますから」

「おいおい、怯おびえないでくれよ」

少しずつ馴なれ馴なれしくなってきた男が名刺めいしを差し出してくる。名刺の右上に父の勤める『コウノ・メディカルカンパニー』のマークが印刷されていた。コウノトリを模もしたマークだ。

その名刺が本物か偽物かなど、克己には分からない。ただ、何かあったときには、証しょうこ拠こになる可能性はある。

差し出された名刺を受け取ろうと軽く身を乗り出した瞬間、克己は男に腕をつかまれた。

——しま……った。

慌あわてて身を引こうとしたが、意外なほどに強い力で門扉の前から引きずりおろされる。

「は、放してください……っ」

叫さけぼうとした口が塞ふさがれた。

座り込んで抵抗するものの、見た目にそぐわない男の力で、道を引きずられる。

急な動きに驚いたのか、克己の腕から飛び降りた志摩子が男に飛びかかり、その顔を引ひつ搔かいた。

「なんだ、このでかい猫はっ！」

「んぎゃ……っ！」

男に振り払われた志摩子が、鈍にぶい声をあげて地面に落ちる。

「志摩子っ、大丈夫か?! あんたたち、何するんだよ！」

「さあ、早く車に乗りなさい」

「……っ」

玄関への階段は、もう一人の若い男に塞がれている。

克己はスマートフォンを取り出すと、すかさず一〇番をしようとした。それくらいのことしか思いつかない。

そのとき——。

一瞬、何が起ったのか、分からなかった。徐々（じょじょ）にじんじんと、頬から熱さが――痛みが広がっている。殴（なぐ）られたのだと理解するまでに、わずかに時間を要した。

手から落ちたスマートフォンは道路の上を跳ねて滑（すべ）っていった。

男は冷たい目で克己（こくぎ）を見おろしていた。

「おっと、申し訳ない。手荒（てあら）なことをしてしまったね」

初めて人に殴られたショックに呆然（ぼうぜん）と座り込む克己へ、男は申し訳なさなど微塵（みじん）も感じさせない様子でにやりと笑って言う。

「君がよいな行動するからいけないんだよ。さあ、早く乗りなさい」

若いほうの男に背後から両腕をつかまれ、立たされた。

「お父さんが待っているのは本当だ。無事に再会したければ、大人しくしたほうがいい」

一見穏やかな脅（おど）し文句（もんく）にも、克己は動けなかった。頭の中で、今起こっていることが整理できないのだ。

自分はどうやら誘拐（ゆうかい）されようとしているらしい。誘拐事件（ゆうかいじけん）などテレビの中だけの出来事だと思っていた。まさか自分が当事者になるなんて思ってもいなかった。

一体、何が目的なのか。

一体、今何が起きているのか。

呆然（ぼうぜん）と突っ立ったままの克己の腕をつかむ男が、苛（いら）立たしげに彼の背を車へ向けて押した。

「早く乗れ！ 両親がどうなってもいいのか？」

「え……？」

両親がどうなっていると言うのだろうか。まさか彼らの身にも、何か起こっているのか？

混乱（こんらん）した頭では、男の言葉を即座に理解できなかった。

「父さんは……。母さんは今、家にいるはず……」

克己は電氣のついていない家を見た。

「さあね。ついて来れば分かるさ」

男は強引に克己を後部座席へ押し込もうとする。

背中を強く押され、それに従いかけたとき、頭上で鈍い音と呻き声うめが聞こえた。

「いい年したおじさんが可愛い子をいじめるなんて、いゝけないんだ」

軽く笑いを含んだ声に顔をあげると、克己を車に押し込もうとしていた男の顔が、ドアの枠わくに叩たたきつけられていた。

「……っ!」

克己は思わず息を飲んだ。

克己の腕をつかんでいた男の頭を押さえつけているのは、癖くせのある茶髪チャパツを一括ひとくくりにし、洒落しやれた髭ひげを生やした男だった。サングラスをかけていることもあり、年齢はよく分からない。若いようにも見えないし、そうでもないようにも見える。

「だ、い、た、い! にゃんこはこの世の宝なんだ

から、いじめちゃ駄、目。だろ?」

いつの間にか片腕に志摩子を抱いた男は、掌てのひらで押しつぶした男の顔を見おろし、口元に人の悪そうわるそうな笑みを浮かべている。

黒っぽいスーツの上下に襟元をくつろげた赤色のシャツを着た姿は、まるでドラマに出てくるヤクザのようだ。

克己は志摩子が彼の腕の中ではつちりと目を開けていることにほっとした。痛がっている様子はないので、大きな怪我けがはなさそうだ。

最初に克己に声をかけた男が、これまでとは違う、どすの利きいた声で誰何すいかする。

「だ、誰だ!」

「通りすがりのイイ男です」

ふっと気障きざったらしく笑った茶髪の男は、つかんだ男の頭を一度持ちあげ、再度車体に叩きつける。ごつりと鈍い音がした。

ずるずるとその場に膝をつきかけた男を後部座席

に蹴りこむと、茶髪男は、克己の腕に志摩子を渡す。
「よかった！ 怪我してないか？」

「にゅー！」

志摩子があつしりと克己のシャツに爪を引っ付けた。怖かったのか、ふるふると震えている。

志摩子のその姿に、乱入してきた男が笑顔をつくつた。そうすると、意外と優しいような顔になる。

「可愛いじゃんこだな。名前は？」

「し、志摩子……」

「そ」

彼はにこりと笑うと、克己の二の腕をつかんで背後に引っ張った。そこを勢いよく拳が通過する。もう一人の若いほうの男だ。

「うわっ！」

克己は彼の背中に庇われる形で、拳から救われたことに気づいた。どうやら彼は、車に押し込まうとしていた男たちから克己を助けてくれようとしているらしい。

肘でみぞおちを打たれた若い男がアスファルトの上で身をよじる。仲間が次々と倒れたのに焦ったのか、運転席の男が慌てて飛びだしてきた。その手が鈍く光るものを握っているのに気づいて、克己は目を睜った。

街灯に照らされるそれは、拳銃のように見える。

ドラマや映画の中で見えたことはないが、少なくともそれは、拳銃のような形をしている。

「ほん、もの……？」

今、ここで、何が起こっているのか。

ドラマの撮影？

それとも……何？

質の悪い悪戯なのか？

ぱつりと呟くことしかできない克己とは対照的に、謎の茶髪男は動じた様子もなく饒舌だ。

「おっと、まっとうな会社員がそんな危ないものを、しかも天下の公道で取りだしていいのかな？」

取り囲んだ男たちに比べ、緊張感の欠片もない彼



の存在が、余計に現実味を薄れさせる。

「それとも危ない職業の方かしら？」

そう言つて彼が上着の中から取り出したのも、黒光りする拳銃だった。

「な……」

推定誘拐犯と推定ヤクザの、どちらが危険人物なのか判断をつけかね、克己はじりじりと後じさつた。

「な、なんなんですか……」

「俺はただのイイ男じゃなくて、実は正義の味方ぢやんなんですよ？」

茶髪の男が銃を構えたままふざけた口調で言う。
胡散臭いことこの上ない。

男たちも警戒心を強めたようだ。目顔を交わし、頷きあっている。彼らは克己から意識を逸らし、銃を構える茶髪の男に向けた。

一気に緊張感が増す。

呼吸することさえはばかれる。

人数で勝る男たちは、じわじわと慎重に、茶髪

の男を囲んでいった。彼らが集中しているのは、お互いが手にしている武器だ。もはや獲物である克己のことなど、誰も気にしていないようにみえた。

克己は彼らからそつと視線をずらした。隣家を越えれば曲がり角がある。そこから真つ直ぐに走っていくと、車が入ることのできない小道が駅前の大通りに続いている。

克己はそろりと一歩下がると身をひるがえし、白い車の停車向きとは逆に向かつて勢いよく走り出した。

大通りまで戻れば人通りも多くなるし、駅前まで行けば交番だつてある。交番に飛び込むことができれば、ひとまずこの怪しい男たちから逃れられるだろう。

初めに声をかけてきた男たちも、後からやつてきた男も、どちらも信用できないとなれば、逃げるしかないではないか。

「……っ！ おいっ！」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。